

「泣いたオムレツ」

参考著書「物語がある広告コピー」

いまでも忘れない。

「はじめてのおつかい」を無事クリアして、まだ間もない頃のこと。

その日のおつかいは難題だった。

「卵のパック」だった。

それがきわめてデリケートな物体であることを、私は意識しすぎたのかもしれない。

まずいことに私は、緊張すると足がもつれて、よくコケる子だった。

卵は、みごとに全壊した。

その時の気持ちをひとことではいえない。

しかられるのはとうぜん覚悟した。

けれど不思議なことに、母は「しかる」のではなく「笑った」のだった。

笑いながら箸で殻を取り除き、オムレツをつくった。

台無しになった卵から、魔法のように美しいオムレツができた。

それから10年ほどたてば、母は朝から晩まで私をしかってばかりになった。

それからまた10年ほどたって、私は独立し、結婚をした。

オムレツを焼くとき、いつも考えることがある。

あのオムレツを見て、大泣きした理由は何だったんだろう。

ただホッとした、というのとも違う。

失格、絶望、救い、驚き。

なんだか「人生というもの」が、よくわからなくなって泣いた気もする。

母に、この思い出は話さない。

「愛情よ」なんて片づけられるのが

シヤクにさわるから、いまはまだ。

いかがですか？

なんか心がじーんとしますね。